

聖天信仰の本義と時代背景を求めて

新田 義圓

ヒンズー教のガネーシャ信仰を

とりいれた大乘仏教

聖天さまとは、もともとインドの原住民ドラビダ族にあつく信仰されたガネーシャまたはガナパチと呼ばれる神であり、現在もヒンズー教徒の間に深く信仰の根をおろしている。

初めはビナヤキヤという障礙の神、人の企てを邪魔する悪神であったが、人々の嘆きにこた

名がある。

「ガネーシャ讃歌」には次のようにうたわれている。

- (一) 頭を深くたれてガウリの息子であるビナヤカ神を心からうやまえ。
擁護者に長命と願望と財産の完全な獲得を祈れ。
 - (二) 第一に巻いた鼻を持つ者、第二に一本だけ牙を持つ者、第三にのろ鹿色の目を持つ者、第四に象の口を持つ者。
 - (三) 第五に甕に似た腹を持つ者、第六に偉大な者、第七に邪魔の王者、第八に煙のような色をした者。
 - (四) 第九に月の紋章をつけた者、第十に障害を取り除く者、第十一に雌牛の飼手、第十二に象の顔を持つ者。
 - (五) 以上の十二の名前を夜明け時、日中、そして落日の夕べに繰り返し唱える者には失敗の懸念は全くない、いやそれどころか絶えず良い結果が得られる。
 - (六) 智識を求める者は智識を得る。
 - (七) ガナパチへの讃歌を口につぶやくだけでも六カ月たてば目的を達成し、一年たてば完全無欠を得ることは絶対に向たがない。
 - (八) この八句を書写して、これを八人のブラフマンに手渡した者は、ただちにガネーシャの恩恵に浴し学識を確保する。
- 右の讃歌に見られるような、ガネーシャの力

えて十一面観音さまが、法華経の普文品（観音経）でうたわれているとおり、救おうとする者の姿を現じてビナヤキヤの美女に姿をかえてこの邪神に近づきこれを誘って、仏教の守護をする善神に変えた。この善神に変わったビナヤキヤをガネーシャあるいはガナパチと呼ぶのである。現在インドでもこの神に対する信仰はあつく、特にガネーシャの故郷と考えられているネパールなどでは、ちょうど我国の地藏さまと同じように、あちこちの街角にその石像が祀られており、供花の絶えることがない。その信仰の

に対する帰依は深く一般に行きわたっており、新たに事業を始める時にはまず、「オム ガネーシャヤ ナマハ（ガネーシャに帰命したてまつる）」と唱えてガネーシャを念じ、新しく本を出版する折も、この同じ文句を本の見返に印刷するならわしになっている。もっと身近には手紙をしたためる時、我々ならば拝啓という書き出しをする個所に、やはりオム ガネーシャヤ ナマハという帰命の句を冠せて本文に移るという次第なのである。これを以てもガネーシャ信仰のあつさがうかがわれるであらう。

このガネーシャが大乘仏教の中にとり入れられ、仏教の守護神となつて大聖歡喜天、略して聖天と称するのであるが、その神格に至つてはガネーシャと少しも変わりが無い。すなわちどの神仏をおいても、まず聖天さまに祈れと言われるゆえんである。

重要な聖天壇修法と

歡喜天の根本霊場としての生駒さん

僧俗、公私、大小の別なく、その願成就を願う時には、他の神仏をいくら頼んでも、まず聖天さまに祈願をしなければ、その願いは達せられないのである。密教の祈祷で大法と言われる四壇構えの修法では、大壇、護摩壇、十二天壇とともに聖天壇は欠かせないのである。これをおおやけの場合で見ると、弘法大師が仁明天皇

広さが窺われるものである。

何か事を新規に始める時、始めた仕事があまく運ぶようにと願う時は、他の神々よりもまずこのガネーシャに祈らなければ願いがかなわない、という根強い信仰が今でも行われている。これはガネーシャが持つ障礙神というもともと神格が恐れられ、まず邪魔が入らないようにとの願いからだと思われる。ガネーシャには、邪魔を引き起し邪魔を取りのぞくもの、成功をさまたげ、または成功をさせるもの、あらゆる願望をくだきあるいは満たすもの、という呼び

の勅許を得て、承和二年（西暦八三五）から宮中真言院で始められ、神仏分離の政令が出された明治の御維新以降は、教王護国寺（東寺）の灌頂院で現在も続けられている後七日御修法という、年頭に当って一月八日から十四日までの一週間、国体安隠、国運隆昌、万民豊樂を祈つて行われる国家的大法にも聖天壇が設けられており、聖天さまへの祈願は絶対に欠かすことのできないものとなっているのである。

祈願者が僧侶や寺院である例を挙げてみよう。

生駒聖天の開祖宝山湛海律師は入山当初から不動明王に一身を捧げ、その悉地を得ようとの願いから不動明王を本尊として宝山寺を開創し、八十八才でここに命を終えるまでに護摩供を修すること、八万枚一ヶ度、十万枚二十七ヶ度、八千枚六十七ヶ度、慈救呪を誦すること百三十億遍、という倫を絶した行をとげられた方であるが、この絶倫の行も聖天さまの力に負うものである。俗人ならぬれつきとした僧侶である律師の願いでも、聖天さまの力を借りずには成就できないことを先刻承知の湛海律師は、弟子の一人である妙道に聖天法を授け、師匠である湛海本人の願成就を聖天さまに祈らせた。その験が律師生涯の行業にありありとみられるのである。

宝山律師の没後、この弟子妙道湛清が師匠のあとをついで宝山寺第二世住職となつてから

は、聖天供を修することが生駒さん歴代住職の本務となつて現在に至つてゐる。それぞれの願を持つてこの寺をおとずれる信者が、その願成就を祈るのは、聖天さまにむけてでなくてはならない。不動明王を本尊とする生駒山宝山寺が、生駒不動ではなく生駒聖天として一般から親しまれているゆえんである。

同じ仏教寺院の仲間でありながら、東大寺が公慶上人による大仏殿の元禄再建にあたり、また高野山金剛峯寺が寛永七年（一六三〇）十月焼失した大塔の再興に際し、両寺とも再興事業の無魔成就を願つて生駒聖天へ祈祷を依頼している事実は、まことに目覚しいことと言わねばならない。生駒さんが歓喜天の根本霊場として僧俗からあがめられてきた経緯がここに見られるであろう。前述した後七日御修法にも毎年生駒さんから山主が東寺に向し、灌頂院に籠つて聖天法を修するならわしになつてゐる。

大日如来の化現として

弘法大師が我国にもたらした歓喜天は、大日如来が衆生済度のために現じた最後方便の姿といわれる。太陽の象徴である大日如来は、我国神道の天照大神に通ずる。伊勢の内宮、外宮が

し遂げたのである。また天明七年（一七八七）、うち続く天災と田沼意次の悪政に悩む民衆のために天明の改革を企てた老中松平定信は、聖天を念じてこの改革に成功したのである。その時聖天に捧げた願文は、東京谷中の越前堀吉祥院に残されている。

民間にあつては蜜柑で名高い紀伊国屋文左衛門、大阪の豪商で、今も淀屋橋にその名を残す淀屋辰五郎、淡路の出身で幕末北海道で大活躍をした海運業者高田屋嘉兵衛など、いづれも聖天を祈つて大をなした人達である。関西にくらべて関東では、民間聖天信者のこれといった人の名を聞かないのは、徳川家康が聖天の御利益を独占しようとして、民間には聖天さまはこわい神様であるとおふれ廻らせ、民間人の聖天信仰をおさえようとした結果だと言われている。

元禄年間幕府の許可を得て四国の別子に銅山をいとなんだ住友家が、その事業繁栄と家運隆昌を念じて寄せた祈祷の依頼文や、当主の病氣平癒を頼んできた手紙が二十通程生駒聖天さんに残されている。また、堂島の米問屋仲間が組合をつくつて、熱心な聖天信仰を続けたあととを物語る文書も宝山寺に見られる。これをもって見ても、関西における聖天信者層の広さが推察できるであろう。

聖天さまの女天、男天とうけとめられ、日本古来の神とたくみに融合して民衆にとけ込み、日本の神々は仏教の仏、菩薩、天などが神の姿でそのあとをたれたものであるという本地垂迹の説によつて、広く日本人の心の中に仏教は根をおろしたのである。

歴史にのこる聖天信者をみると、寛平年間（西暦九世紀末）右大臣藤原良世の娘で宇多天皇の女御であつた藤原胤子が河原院の本尊である聖天さまに帰依し、お供えの時にはまずその上分を戴いてからするようにと同院主の良禪和上に教えられ、そのとおりにお供えを続けているうちに皇后にとりたてられた、という話が白宝口抄巻百三十の聖天法第一に見られる。また、昌泰四年（九〇一）右大臣菅原道真が左大臣藤原時平のざん言を蒙つて九州の大宰府に流され、その無実の罪をはらそうと天拝山で祈つたのが聖天さまである。菅公は没後天満大自在天となり、藤原家に種々のわざわいをもたらした。すなわち聖天の化身として障礙を現じたのである。またガネーシャがもともと学問の神（カトマンズの博物館で見たガネーシャの像には「学問の神」と英語で説明がつけられていた）とされ、この点でも天神様と通じてゐるのは妙である。京都北野天満宮の本地寺本尊が十一面観音であるのも聖天さまに通ずる。

命を救われた女性信者

— 聖天さまのご利益

最後に聖天さまの働きをざざりと示す一信者の話をもつてこの稿を終わることとする。

生駒聖天の信者は、京阪神を中心に全国に及んでいるが、一番北の端、北海道利尻島の信者の場合をとりあげてみよう。住職をはじめ我々も、この信者がもともと関西に在住中、生駒聖天に参つておつたのが、仕事かなにかの関係から利尻島に移り、その後も信仰を続けておるものとばかり考えていた。ところがこの信者は、利尻島生まれの女性なのである。どうして生駒聖天との縁ができたかというところ、この女性が生まれ落ちた時、医者は、「この娘はどうみても十八、九才までしか生きられない身体の故障をもつている。気の毒だが現代の医療をもつてはどうにもならない」とその母親に告げた。悲しんだ母親は、この島にある不動堂に参つて、一心に娘の延命を祈つたのである。そんなある日、不動行者の僧侶が島にみえたので、その母親は彼に頼んで柴燈護摩を焚いてもらい、娘の長命を祈つたのである。

その僧侶いわく、その願いなら不動さんに祈つても駄目である。聖天さんにお願いしなさい。私は、聖天さんをおがむ法を授つていないから、祈祷してあげることができないが、これからは聖天さんのご真言「オン キリ ギャク ウン

歴史に名だたる聖天信者

台密系の儀軌阿婆縛抄、聖天の項に「右大臣実定競馬に勝つ事」という一節があつて、同抄編者承澄が右大臣実定に頼まれて競馬に勝つように、敵手の名を書いて聖天さまの下に敷き祈願したところ、願いのとおりに勝つことができた。ほかの勝負事もこれと同じようにすれば願いのとおりになると述べてゐる。降つて鎌倉時代には、斉藤別当実盛が聖天信者として知られ、彼の領地に勧請したのが埼玉県大里郡妻沼町の歓喜院に祀られる有名な妻沼の聖天である、と『武蔵風土記稿』は伝えている。妻沼の聖天に伝持される銅製の錫杖（総高四七糎）は、建久八年（一一九七）丁巳四月八日辛亥の年紀を持ち、重文に指定されている。錫杖の円輪中に双身歓喜天像が立ち、左右に二童子を配した三尊式のものであり、我国では最古の聖天像である。

戦国時代の末期豊臣秀吉は、京都伏見の醍醐三宝院に聖天像を寄進して聖天に祈願し、一平民から身を起こし天下を牛耳るという大願を果たした。徳川家康もまた天海僧正をして熱心に聖天を祈らせ、徳川三百年の基礎を築く大業を成

ソワカ」を唱えて聖天さんにおまいりしなさいと教えてくれた。それ以後、母親は聖天さんのご真言を唱え一心に娘の長命を祈り続けたという。そのしるしは、十八、九才と医者に言われた年令をすぎ、結婚をして子供をもうけるといふ一人前の女になれたということで、はつきりと見せられた。

娘の長命を祈つた母親の聖天信仰は、そのおかげで子供をもうけるまでに命を保てたその娘にうけつがれ、母親が果し得なかつた生駒聖天へのお参りを、この娘が実行したのである。

夜中に生駒に着いたこの利尻島の信者は、お通夜をして門衛に山主への面会を頼み、翌朝山主にまみえてお礼かたがた語つたのが、以上に述べたこの信者の長命談なのである。

聖天さまの本誓を目の前に見せられた思いがする、と山主は語つていた。

（にった ぎえん・生駒山宝山寺執事）